The Japan Society for the Study of Education

身が流れていなければ、初発の流動体へと潜り込めない。だからこうした「職人」は、日々自らを溶かし続ける。自分の言葉を溶かし、わが身のコワバリを溶かそうとする。にもかかわらず、固める仕事も引き受ける。言葉にする仕事も引き受けようとする。引き受けながら、しかし自分の言葉を何度も否定する。否定しながら、透明な流れのままの感性を、言葉の内に流し込もうとする。

そうした流れを生きながら、教育の枠組みを少しずつ溶かしてくれる「職人（アーティスト）」。個々の教科の内側から、その枠組みを食い破る仕方で、区切られる以前の出来事（無分節の・初発の流動体）を解き放ち、そこから湧きでる流れにのって、個々の教科を読み直してくれる職人たちが、今求められている。

（勁草書房刊　2005年5月発行　四六判　217頁　本体価格2,500円）

今村 光章 編

『持続可能性に向けての環境教育』

安藤　聡彦（埼玉大学）

ここ数年、「持続可能」という言葉と「教育」とをむすぶ新たな教育概念を耳にする機会が増えてきた。例えば、「持続可能な発展のための教育」(Education for Sustainable Development; ESD)、あるいは「持続可能性のための教育」(Education for Sustainability; EfS) などがそれである。1997年にギリシャのテサロニキで開催された「環境と社会に関する国際会議；持続可能性のための教育とパブリック・アウェアネス」において、「環境教育は、環境と持続可能性のための教育と言うこともできる」とされたことが、こうした動向に拍車をかけていることは言うまでもない。最近では、「環境教育からESD／EfSへ」という概念の移行が環境教育をめぐる議論において前提とされることも少なくない。だが、それではESDないしEfSとは何か、ということになると、まだ研究蓄積が多くはないのが日本の環境教育研究の現状ではないだろうか。

本書は、これまで数年にわたってこのテーマをめぐる共同研究を積み重ねてきた編者らのグループが、その成果として世に問うた労作である。参加しているのは、教育哲学、環境思想、科学教育といった、まさにこのテーマを論じるために不可欠のバックグラウンドを有する人々である。編者の今村は、「本書の狙いは、『希望』の火を灯すことにある」と言い、そのために「基礎的な理論を構築する」ことを目指しているという。ESD／EfSを論じるための「基礎的な理論構築」――誰もが望んできた作業だろう。そうした重要な作業に着実に取り組んできて、ここにひとつの里程標を築いた著者たちの努力に、何よりも敬意を表したい。

全体は9つの章から構成されている。

第1章「『環境教育』から『持続可能性を実現する教育』へ」及び第2章「用語『環境』『環境教育』の系譜」（ともに今村）は、本書を貫く課題意識と基本的概念の整理にあてられている。第3章「『持続可能性』概念の系譜」及び第4章「エコロジー思想と持続可能性に向けての教育」（ともに井上有一）では、「持続可能性」概念の生成史とそれがどのようにESD／EfS論へと展開していったのかがおさえられ、また「持続可能性に向けての環境教育」を論じるにあたってのエコロジー思想の積極的な役割が検討されている。第5章「エーリッヒ・フロムの思想と持続可能性に向けての教育」（今村）では、フロムの社会的性格論と社会変革論との関連が読み解かれている。第6章「ボブ・ジックリングの『持続可能性に向けての教育』批判を超えて」（今村、石川聡子、井上、原田智代、塩川哲雄）では、カナダの環境教育学者ジックリングのESD／EfS批判論に対する反批判が展開され、また第7章「『持続可能性に向けての教育』を阻む障壁をのり越えるために」（今村、塩川）では、ジョン・フィエンらの研究をもとに、「持続可能性に向けての教育」の実践を阻む障壁が分析され、それを乗り越えていく可能性が模索されている。第8章「市民の環境保全活動における科学コミュニケーション」（石川）では、市民が環境保全活動でしばしば遭遇する科学コミュニケーションの機会に注目し、そのコミュニケーションをさらに促進するためのスキルについて検討が加えられている。終章「ホンキで語る『持続可能性に向けての教育』論のホンネ」（今村）では、「持続可能性に向けての環境教育」論にとってイデオロギー性とコミュニケーションとが自らを既存の環境教育論から区別するメルクマールであることが結論として確認されている。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society for the Study of Education

今村が指摘しているように、日本の環境教育にかかわる出版物の現況についてみれば、たしかに「ほとんどといっていいほど環境教育の理論に本格的に言及した書物がない」。本書はその欠落を補い、「持続可能性に向けての環境教育」論として環境教育論を展開させていくためのひとつの見取り図を提出している。「国連・持続可能な開発のための教育の10年」がスタートし、日本においてもそのための様々な議論や仕組み作りがおしすすめられつつある今日、それらの議論や仕組みの質を立ち止まって吟味するためにも、多くの関係者が本書を紐解き、そこからさらなる議論が展開されていくことを待ち望みたいと思う。言うまでもなく、基軸となるべき問題は、「環境教育」ないし「持続可能性に向けての（環境）教育」論とはいかなる教育理論であり、それは教育理論の歴史のなかでいかなる場を占める（あるいは占めるべき）理論であるのか、という問題であるはずである。例えば、ジックリングによるESD／EfS批判とそれに対する今村らの反批判を読む時、1950年代に遠山啓と矢川徳光との間でかわされた著名な論争を想起するのはひとり紹介者だけではあるまい。そして、この連想の先には、戦後日本において「社会主義と教育学」問題と環境教育生成史とはどのようにクロスしていたのか、いなかったのか、という問題も浮上してくることになるだろう。さらにさかのぼって、1930年代末に、森戸辰男がオウエンやモリスの思想を「環境教育思想と社会主義」「芸術的環境教育思想」といった視角から評価していたことも想起される。

決して安価な本ではないが、装幀もなかなかすてきだ。こんな本をテキストに夜な夜な学生・院生たちと語り合ってみたいものだ。ぼくらはいま、何をこそ次の世代に伝えていかなければならないのか、と。

（昭和堂刊　2005年11月発行　A5判　210頁　本体価格3,500円）

NII-Electronic Library Service